

# 谷鼎歌碑めぐり

## 谷鼎歌碑めぐり

### 谷鼎歌碑めぐり



ひぐらしの  
一つのみ鳴く  
こゑを背に  
夕あかね照る  
みちくんだり行く

#### 谷鼎の略歴

谷鼎は、明治二十九年（一八九六）九月十六日、谷鼎次郎の長男として生まれた。神奈川県中郡西秦野村千村（現在の秦野市千村）に幼年期を過ごし、地元の西秦野村立尋常高等小沢小学校を卒業ののち、明治四十四年、神奈川県師範学校（鎌倉師範）に進学した。さらにその後、東京高等師範学校、京都帝国大学に学んだ。

東京府立第五中学校（現在の小石川高校）の教職をつとめながら、万葉・古今・新古今等の和歌研究に従い、あわせて窪田空穂の短歌誌「国民文学」の歌人として頭角をあらわしてゆく。

昭和六年、谷鼎の名を世に高めた斎藤茂吉との花紅葉論争がはじまる。藤原定家の名歌「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」の解釈をめぐる、上の句を实景とする斎藤茂吉と、新古今時代の美の規範をあらわしたとする谷鼎との間に、二年にわたって論争が交わされた。

さらに昭和十六年には第一歌集『伏流』を刊行し、論・作両面に活動する存在として歌壇に独自の位置を占めた。

昭和二十年、空襲で東京の自宅が焼失し、秦野に帰住。郷里の風土に根ざした数々の佳作が詠まれてゆく。小田急線渋沢駅南口広場の歌碑に刻まれた、ひぐらしの一つのみ鳴くこゑを背に夕あかね照るみちくんだり行く

の歌も、ふるさとの坂道を詠み、夕あかねの中ひぐらしの声に耳をかたむける作者の姿が印象深い。

昭和二十六年には大東文化大学教授に就任。和歌研究の大家の一人として活躍するとともに、歌人としても第一線に立って活動し、歌誌「近代詩歌」を創刊、主宰した。昭和三十五年（一九六〇）七月十五日、六十三歳で逝去。

歌集には前記の『伏流』をはじめ『青あらし』『冬日より』『松籟』『水天』の五冊があり、没後四十年に『定本谷鼎全歌集』としてまとめられた。研究書には『定本歌集評釈』『短歌鑑賞の論理』『近代短歌の鑑賞と歌論』をはじめ多くの著作がある。また、大東文化大学・秦野市立西中学校ほか各地の校歌を作詞した。

解説 山田吉郎  
（「水原」編集人）

\*この表紙素材は、秦野木綿からとりました。秦野木綿は、明治後期から昭和30年代まで生産が続き、日本三大銘葉と言われた「秦野たばこ」と並び、秦野の近代化に多大な貢献をしました。意匠を凝らしたこの素材に、当時の職人の粋が感じられます。  
\*表紙短冊の歌は谷鼎直筆によるもので、小田急線渋沢駅南口広場の歌碑に刻まれています。

# 谷鼎歌碑

秦野市立図書館  
Hadano City Library

〒257-0015 神奈川県秦野市平沢94-1  
TEL (0463) 81-7012 FAX (0463) 83-8370  
<http://navi.city.hadano.kanagawa.jp/tosyokan/index.htm>